

小説

くにきだどっぽ

国木田独歩

柳井市・田布施町
(1871～1908)



提供・日本近代文学館

【著作】

『武蔵野』（明治34・民友社）
『運命』（明治39・佐久良書房）
『定本 国木田独歩全集』（昭和53・学習研究社）
ほか

独歩は明治九年（一八七六）、父専八の山口裁判所勤務に伴い、東京から山口にやってきた。以後十八年間、専八が県下の裁判所へ勤務すると共に、それに従い、各地に多くの足跡を残した。それは後年の作品に影を落とすことになる。

独歩はカーライル、エマーソン、ワーズワース等の影響により、文学的出発をするが、最も強い感化を受けたのはワーズワースの”人生を自然の懐にとらえる”思想であった。その「田舎賛美」の考えは独歩が若き日に過ごした山口県の温和な自然の美や、そこに育まれた素朴な人情と密接な関連を持つている。錦川と錦帯橋の町岩国では、幼少期を回想した「画の悲しみ」「泣き笑い」や、主人公が夜の錦川を下り、やがて自然の懐に帰っていくという「河霧」（川の文学）の佳作がある。また、多感な少年時代に過ごした山口を舞台に「馬上の友」「山の力」（山の文学）の名作を残している。青春期を過ごした田布施・柳井地方では、独歩文学搖籃の地というべく「置土産」「帰去来」「富岡先生」「少年の悲哀」「酒中日記」等の主要な作品が生まれている。特に「少年の悲哀」（海の文学）は傑作である。

今日独歩の描いた風景は失われつつある。だが、彼の作品はみずみずしく私たちに語りかけ、いつまでも減びることはないであろう。

（文・桑原伸二）



『運命』

国木田独歩 年譜

（提供・桑原伸二）

明治4（一八七二）年		旧暦7月15日（8月30日）、千葉県銚子に生まれる。幼名亀吉。のち哲夫。父龍野藩士、国木田専八。母まん。	明治26（一八九三）年		二二歳
明治9（一八七六）年	五歳	父専八が山口裁判所（書記）に勤務になり、山口へ一家転住。翌年父の転勤に従い、広島へ転任。	明治27（一八九四）年		二三歳
明治11（一八七八）年	七歳	父転勤のため岩国に転居。錦見小学校（現・岩国小学校）に入学。弟収二が生まれる。	明治28（一八九五）年		二四歳
明治16（一八八三）年	一二歳	父が山口治安裁判所へ転勤のため山口に移住。今道小学校（現・白石小学校）に転校。成績優秀、同校中山伸一校長の瞩目するところとなる。	明治29（一八九六）年		二五歳
明治18（一八八五）年	一四歳	山口中学校に入学。父が萩へ転勤したので寄宿舎に入る。級友の今井忠治と親交。	明治30（一八九七）年		二六歳
明治19（一八八六）年	一五歳	『佳人之奇遇』『西遊記』等を愛読。司法官制度改正のため、父が非職となる。夏・冬の長期休暇には萩に帰省。親友の今井忠治が経済事情のため退学、上京。	明治31（一八九八）年		二七歳
明治20（一八八七）年	一六歳	山口中学校学制改革を機に退学。今井忠治に勧められて上京。法律学校に通う。	明治34（一九〇二）年		三〇歳
明治21（一八八八）年	一七歳	民友社系の「青年思海」同人となり、「群書ニ渉レ」を発表。東京専門学校（早稲田大学の前身）英語普通科に入学。父が萩治安裁判所書記に再任される。	明治35（一九〇二）年		三一歳
明治22（一八八九）年	一八歳	父転勤のため舟木（現・宇部市）へ転居。暑中休暇に帰省し、亀吉を廃し、哲夫と改名。	明治36（一九〇三）年		三二歳
明治23（一八九〇）年	一九歳	学友水谷真熊（元、徳富蘇峰の大江義塾の塾生）らと親交。植村正久の一番町教会へ通い始める。	明治38（一九〇五）年		三四歳
明治24（一八九一）年	二〇歳	植村正久により受洗。青年文学会で徳富蘇峰と出会い、吉田松陰に傾倒する。学校改革のストライキに参加したが、不成功。これを機に退学、両親の下、熊毛郡麻郷（現・田布施町）吉見トキ方に帰省。家庭教師先で石崎トミと相知る。松陰の松下村塾を模して波野英学塾を開く。	明治39（一九〇六）年		三五歳
明治25（一八九二）年	二二歳	父転勤のため柳井に移住。波野英学塾を閉鎖。石崎トミに失恋。弟収二と上京。「青年文学」の編集に参加。『ワーズワース詩集』を入手、以後愛読し、文学観を決定づけられる。	明治40（一九〇七）年		三六歳
			明治41（一九〇八）年		三六歳

少年の歡喜が詩であるならば、
少年の悲哀もまた詩である。
自然の心に宿る歡喜にして
もし歌うべくんば、自然の心に
ささやく悲哀もまた歌うべきであらう。

『少年の悲哀』明治三五年の冒頭文から



「少年の悲哀」の舞台となった平生町水場

「欺かざるの記」を起筆。父専八定年退職。蘇峰の紹介で大分県佐伯の鶴谷学館教頭となり、弟同伴で赴任。近郊を散歩し『ワーズワース詩集』をひもとく。冬休みを利用して柳井に帰省。

父のため、柳井で印刷業を企てたが金策不調で断念。学館退職。弟と教え子四人を伴って上京。日清戦争の従軍記者として乗船し「愛弟通信」を『国民新聞』に連載。好評を得た。

佐々城本支・豊寿夫妻の従軍記者招宴に臨み、その長女信子と相知る。豊寿は不賛成ながら、恋愛、結婚へと進展。蘇峰の尽力で逗子に住み『少年伝記双書』を執筆して衣食の資とする。

信子窮乏生活に疲れて失踪、離婚に至る。傷心のあまり京都の内村鑑三を頼り、渡米を企てたが不成功。帰京して上渋谷村に在住。田山花袋・松岡（柳田）国男らの文学仲間に出会う。

処女作「源叔父」を発表。翌年にかけて「武蔵野」「忘れえぬ人々」等の名作を次々に発表。

榎本治子と再婚するも一家窮迫。数年間、作品の発表はほとんどなし。

第一小説集『武蔵野』を刊行するも不評。「牛肉と馬鈴薯」等を発表。

鎌倉に居住。「富岡先生」「少年の悲哀」「酒中日記」「空知川の岸辺」等の名作を発表。

『近時画報』を創刊。翌年の日露開戦で『戦時画報』と改め、売れ行き増す。その間、「運命論者」「馬上の友」「正直者」「女難」等の名作を発表。

第二小説集『独歩集』を刊行。

第三小説集『運命』を刊行。急に文名高まる。独歩社を興すも翌年破産。肺患の兆候あり。

第四小説集『濤声』を刊行。「窮死」を発表し、自然主義作家として注目される。病状悪化。

「竹の木戸」が自然主義の秀作として高く評価される。病勢悪化し、神奈川県茅ヶ崎の南湖院に入院。咯血が続き、6月23日夜、死去。法号、天真院独歩日哲居士。青山墓地に眠る。